法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

中・近世英文学にみるユダヤ人像(1066-1600)

河野, 徹

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
81
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
26
(発行年 / Year)
1992-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004699

Hosei University Repository

中・近世英文学にみるユダヤ人像（1066—1600）

河野　徹

I　パウロ神学の影響

神学的な反ユダヤ主義がキリスト教の諸聖典とりわけ『新約聖書』に根ざしていることは，常識といえる。しかしこれほど疑義が続出する常識も稀だろう。まずイエス自身がユダヤ人であり，たとえ彼がユダヤ教の一部形骸化した律法遵守のあり方を批判したとしても，ユダヤ教本来の普遍的なモラルは彼の教えの母胎となったはずである。やがて彼は終末的，霊的な「神の国」の到来を告げ，神の救いに与かるための悔い改めを説き，その仲立ちとして自らをキリストつまりメシアと称した。これは「他に神があってはならない」というモーゼの第一戒律を蔑ろにした「冒瀆」である，とユダヤ教主流パリサイ派が激昂し，他方地上の王たるローマ皇帝への不敬にも当たるとして，総督ピラトが処刑を裁決した。受難・昇天・復活というイースター神話がここに成立する。その後ユダヤ教とキリスト教の乖離が進むにつれて，イエスのユダヤ性は，ユダヤ人側からも，キリスト教徒側からも，あってなきがごとき扱いを受けるようになる。記憶というものは，受動的に原体験を保存したというよりも，むしろ能動的に第一回目の回想をコピーした状態で残される。記憶のこのような主観性からしても，初回の回想コピーに，当事者の利害や恣意が刻み込まれることは避けられない。

パリサイ派の一員として，キリスト教最初の殉教者ステパノの石打ち刑にも立ち会い，キリスト教徒弾圧の先鋒に立っていたパウロは，紛れもなく律法第一主義の誇り高きユダヤ人であった。その彼が，キリスト教徒検束の旅の途上，「復活した」イエスの声を聞いて「回心」し，迫害者から宣教者への転向を遂げた。パウロは生前のイエス，親しく神への愛と隣人への愛を説く人間イエスに接したことがないから，直弟子たちのようにその人格の力で「イエスは

Hosei University Repository

キリストなり」という信仰に導かれたわけではない。天上のイエスに招かれて回心を経た彼は，当然イエス生前の言行よりも「十字架のキリスト」を強調する。イエス・キリストは万人の罪を一身に引き受け，万人の救いとして蘇ったのであり，この復活を信じない者に救いはない。ユダヤ教の律法を完全に守れる人はいないから，だれもが律法の呪いの下に罪人として生きている。律法によってのみ生きんとする者に救いはない。「人が義とされるのは，律法の行いによるのではなく，信仰によるのである」（ロマ３：28）[1] パウロは，人間イエスにみられる人と神との直接のつながり，つまり「イエス自身が抱いていた信仰」でなく，「イエスに関する信仰」を宣べ伝えた。人は，十字架のキリストを仲立ちとしないかぎり，神につながるすべはないという信仰である。[2] これこそ，パウロが数々の書簡の形で後世に遺したイエス回想のコピーであった。イエスの一切の言行は「十字架のキリスト」につながる。「かくて死後の復活に始まる信仰が，ついに生前の信仰を色づける」[3]

同じ原始キリスト教徒でも，依然としてユダヤ教律法の遵守を唱えるイエスの兄弟ヤコブやペテロやヨハネらのエルサレム派と，福音主義に立つパウロやバルナバらのアンティオキア派の間では，イエスをメシアとして認めるという基盤こそ共通であったが，とくに割礼の是非をめぐって，重大な争議が生じていた。割礼は族祖アブラハムが神と交わした契約の徴しとしてユダヤ民族性の不可欠な象徴であり，そこに秘められた密儀的意味からしても，強い拘束力を持つものだ。ユダヤ教の神を信じ，道徳的律法を重んじる者は，割礼なしでも神の僕ではないか，イエスをメシアとして認めるものは，割礼なしでも兄弟として迎えるべきではないか，という問いかけは，ユダヤ人の民族的矜持とユダヤ教の権威を失墜させるものであった。

パウロの手紙には，「ユダヤ人であれギリシャ人であれ」とか「ユダヤ人にもギリシャ人にも」とか「ユダヤ人もギリシャ人もなく」といった包括的救済の表現が頻々と用いられている。キリスト教会史からすれば，パウロの最も顕著な功績は，原始教会に残っていたユダヤ教律法重視の慣例から離れ，イエスの復活をユダヤ人に関わるだけでなく，人類に関わる出来事として広めたことだろう。「キリストは律法の終わりであり，ユダヤ教の務めはもはや尽きた」[4] この決然たる律法の否定ゆえに，パウロは当然ユダヤ教徒だけでなく，ユダヤ人キリスト教徒からも敵視された。神を瀆す邪教の元凶と目されたのだ。現代でも彼は，ユダヤ人側から「反ユダヤ主義の源泉にして起源」（“fons

Hosei University Repository

et origo”），甚だしきに至っては，「ユダヤ人の敵」とさえ呼ばれている。これは，初期の教父時代このかたキリスト教側が，パウロの教えからその歴史的背景を捨象し，目的論的に蒸留・濃縮した形でその教えをユダヤ教徒抑圧の正当化に役立ててきたからだろう。このようにパウロに関する回想も，彼の死後早々からさまざまな利害や恣意を孕んで，原体験とはかなり色合いの異なるコピーが出回ったのである。

パウロは，イエスの死後40年以内に「神の王国」が到来するものと信じていた。ローマ帝政下の苦難・迫害がいやますなかで，神の義を介しての最終的解決を待望する黙示的言説が盛んに行われた時代でもあった。パウロとしては，イエスが復活し神の右側という栄光の座についたことで，イエスにおける神の顕現が確認されたのだから，世界秩序の大変革は必至と思われた。イエスを介して再び歴史に直接関与した神が，なぜいまだにその御業を果たされないのか，なぜ世界は旧態依然なのか――こう問い掛けるユダヤ教徒をパウロは納得させなければならなかった。「神の王国」は絶対に保証されているけれども，神に反逆する勢力との闘争に勝利してはじめて実現するだろう。イエスにおける神の顕現をユダヤ人たちが認めようとしないのは問題だけれども，結局彼らも目覚めて，光明を見ざるを得なくなるから，遠からず一切の解決がつくはずだ。このパウロの予言通り「神の王国」が実現し，世界が変貌していたら，イエスの神性に対するユダヤ人たちの疑惑や反発も一時的なものとして忘れ去られただろう。実現しなかった「神の王国」に代わって，彼らの前に立ちはだかったのは「教会」であった。[5]

パウロの死後一世代を経ずして，教会の主導権は非ユダヤ人の手に握られていた。[6] すでに「神の王国」は歴史研究の一主題並の扱いとなり，その実現は時の果てるまで延期された。パウロが万民救済を念じていたのに反して，教会は，「イエスにおける神の顕現」を信じない異端者の盲目性を，「一時的な」現象として忘れ去るどころか，永遠に呪われた宿命とみなした。赴くところユダヤ人は「永遠なる」反キリスト者，つまり神の御心に背き続けるサタンの手先とされてしまう。初期教会がこのような形でパウロの思想を継承し，やがて4世紀から6世紀にかけてキリスト教がローマの国教として定着すると，教父たちは国家権力に乗じて，思想・制度の両面で「神学的反ユダヤ主義」を優勢ならしめた。ユダヤ人を一切の公職と名誉ある社会的地位から追放したテオドシウス2世（在位408-50）の布告は，以後ヨーロッパ諸国に受け継がれ，18世

Hosei University Repository

紀までその効力を失わなかった。

歴代ローマ皇帝がまだ頻々とキリスト教を弾圧していた頃，固い団結で周囲に越えがたい一線を画していた信徒たちは，後のゲットー・ユダヤ人同様，周囲からさまざまな誤解を招いたに違いない。密会の部屋を覗くと，妖気漂う気配のなかで，キリストの血だといって葡萄酒が次々に手渡されている。覗いた当人は，本当の血と思い込むから，話に尾鰭がつき，赤ん坊を殺してその血を飲み合っている，と言い触らすだろう。キリストの肉としてパンを口にすれば，人肉を食らったことになり，邪推は近親相姦，乱交へと発展するだろう。[7] 中世以来ユダヤ人を悩まし続けた「儀礼殺人」の流言は，初期のキリスト教徒たちをも悩ましていたのだ。かつての被害者が，同じ偏見と差別の加害者側に回るというのは，人間の悲しい性である。

キリスト教神学はパウロの死後数世代ですでに形成されていたが，ヨーロッパ諸国の民衆に隈なく普及するには，さらに4，5世紀を要した。キリスト教に入信した人々にとっても，歴史的にユダヤ人が果たした役割は忘れがたく，教会の聖典を繙けば，イエスも使徒たちも，またパウロ自身がユダヤ人であった。ユダヤ人に向けられていた敬意を押さえ込むには，さらに長い時間をかけなければならなかった。民衆レベルの反ユダヤ主義が本格的に跋扈し始めるのは，第1次十字軍運動以後のことである。しかし教会の勢力が中東とヨーロッパ全域に伸張してからというもの，ユダヤ人は，反キリスト者即ち絶対的他者という普遍的な役割を背負わされた。神の子に逆らうユダヤ人の言動には，当然サタンの力が投影されており，このサタンの権勢をせき止めるのが，教会の役目と信じられた。

この信念を支えた思想は，勿論福音書に根ざしている。たとえばキリスト殺しを不信の徒ユダヤ人が犯してきた一連の罪悪の頂点に位するものとみなす論拠は，3つの共観福音書に記された「葡萄園」の例え話に求められた。葡萄園の主（神）は，葡萄園（イスラエル）を小作人（ユダヤ人）の手に委ねる。主は時折召使（預言者）を遣わして，果実の分け前を受け取ろうとされるが，不実な小作人どもは神の召使を殺してしまい，ついに神は御子イエスを遣わされる。ところが彼らは，イエスをも殺して葡萄園の外へ放り出してしまった，というのである。（マルコ12：1-12；マタイ21：33-46；ルカ20：9-19）

ヨハネによる第4福音書は，他のどのキリスト教聖典よりも初期教会の中心思想を効果的に表現している。「『神があなたたちの父であれば，あなたたち

Hosei University Repository

はわたしを愛するはずである。……わたしの言っていることが，なぜ分からないのか。それは，わたしの言葉を聞くことができないからだ。あなたたちは，悪魔である父から出た者であって，その父の欲望を満たしたいと思っている。悪魔は最初から人殺しであって，真理をよりどころとしていない。……神に属する者は神の言葉を聞く。あなたたちが聞かないのは，神に属していないからである』」（ヨハネ８：42-47）ユダヤ人をキリスト殺し，そして悪魔の子と明確に指名したことで，ヨハネ福音書は，以後キリスト教の伝統として持続した反ユダヤ主義の根本に究極の神学的表現を据えたのである。

２世紀から６世紀にかけて初期教父たちは，頑迷かつ盲目なユダヤ教との対比で，キリスト教信仰の真実性を論証しようと努めた。この伝統に沿い旧・新約聖書からの引用でユダヤ人の悪魔性とユダヤ教の劣等性を最も激烈に強調したのが，４世紀末のアンティオキア教会長老ジョン・クリソストムである。「ある預言者によれば『まことにイスラエルは，強情な雌牛のように強情』（ホセア４：16）であり，また別の預言者はイスラエルを『馴らされていない子牛』（エレミヤ31：18）と呼んだ。何の役にも適していないこんな動物は，屠殺に適しているだけだ。……もし彼らが神なる父を知らず，神の御子を十字架に懸け，聖霊の助けを撥ねつけたのなら，シナゴーグは悪魔の住まいであると自信をもって断言できないだろうか」[8]

ユダヤ人に死を，というクリソストムの弾劾は，暴力誘発の危険を孕むから極端論者に濫用されやすく，それに代わって教会の支配的見解となったのは，むしろ悲惨と淪落に陥った状態のままでユダヤ人を生き永らえさせよ，というアウグスティヌスの教えであった。ユダヤ人はキリストを殺したから死に値するけれども，弟アベルを殺したカイン同様地上を彷徨わせて，神の御心を体したキリスト教の究極的真実そして最後の勝利を証言させるべきだ。キリストが再臨するとき，ユダヤ人は結局自らの過ちを認めキリスト教そして神の国に帰依するだろう，さもなければ悪魔の国に堕ちる他はない。[9] 人類の歴史は神がこの２つの国を準備する過程にすぎない，というアウグティヌスの歴史観が，彼のユダヤ人対策にも反映している。大先達パウロと同じく救済の余地を説いているけれども，ユダヤ人でもない人類最初の殺人者カインの「刻印」(the mark of Cain) をユダヤ人に押しつけたのだから，悪の化身，悪魔の手先としてのユダヤ人像は温存されたことになる。中世からナチス・ドイツの現代までユダヤ人が着用を強制されていた多種多様な識別用バッジは，この「カイン

Hosei University Repository

の刻印」の延長に他ならない。[10]

Ⅱ　中世イギリスのユダヤ人——1290年の国外追放まで

597年教皇グレゴリウス1世の命でイングランドへ派遣され，やがて初代カンタベリー大司教となるアウグスティヌスは，[11] エセルバート王を改宗させ，ローマの修道院制度を導入するなど「イングランド人の使徒」として宣教に当たり，その後681年にはアングロサクソン諸部族がすべてキリスト教化していた。アングロサクソン文学はその基本思想を『聖書』や教父らの説教に仰いだ宗教文学であり，旧約時代のユダヤ人は別として，イエスと同時代以降のユダヤ人が好意的に扱われることはなかっただろう。尚武を伝統とするアングロサクソンたちは，悪魔と渡り合うキリスト教の闘争的な要素に魅せられたかもしれない。やがて征服者ノルマンの手下として生身の姿をあらわしたキリスト殺しの後裔どもに対して，土着のイングランド人はすでに反ユダヤ的偏見を植えつけられていたはずである。

ユダヤ人のイギリス移住は，1066年のノルマン征服に始まったというのが定説である。ノルマンディーとくにルアンのユダヤ人が，ウィリアム1世から経済改革の先鋒役を仰せつかった。それまでのイギリスの商業といえば物々交換だったから，封地からの税収を貨幣で行いたい王としては，ユダヤ人の経済・金融面での協力が必要であった。彼らはすでに高利貸付や信用貸付の観念操作に長け，進んだ簿記法を駆使して債権管理の要領も心得ていたはずである。[12] 何分キリスト教徒は，教会法によって高利貸付を禁じられていたから，ウィリアム1世も，同じく2世赤顔王（William Rufus）もユダヤ人を歓迎した。封建的主従関係にも，同業組合にも組み入れてもらえないという意味で，彼らは相変わらず二重に社会から排除されてはいたけれども，ユダヤ人同士で平穏な社会生活を営むことを許され，ケンブリッジ，オックスフォードをはじめウィンチェスター，ロンドン，リンカンなどに定住した。1086年に編纂された『ドゥームズディ・ブック』に，早くもユダヤ人の買収に係る土地が記載されている。[13]

1096年ルアンで十字軍によるユダヤ人殺戮があり，その後大陸各地でユダヤ人放逐が相次いだため，ユダヤ系住民の流入が増大して，ヘンリー2世（在位1154-89）の治世末期には，国内約30箇所に拡散していた。彼らの間には医師

Hosei University Repository

や金細工師や兵士，それに葡萄酒，魚，チーズなどを扱う商人がおり，[14] 最も顕著な職種として200人ほどの高利貸付業者がいた。国王は戦時平時を問わずたえず彼らから金融を受けており，彼らの代表者が「財務代理人」(treasury agents)あるいは「国王代理人」(crown agents) として御用を勤めていた。[15]

中世イギリスのユダヤ人富豪として最も有名なのは，スコット作『アイヴァンホウ』の登場人物アイザックのモデルとされるリンカンのアーロンだろう。彼の商業と高利貸付業は国内25州にまたがり，その中の17州に代理人が出向いていた。1186年アーロンが死去すると，ヘンリー2世は早速彼が遺した莫大な財宝と債権を王室に帰属せしめ，もっぱらその債権の徴収に当たる特別の部署を財政庁内に設けたほどである。ユダヤ人が，ギルドへの加入なしで各種の職業に従事できたのは，たしかに国王から生命と財産の安全を保証され，職業上の特権的地位を認定されていたからではあるが，アーロンの例で明らかなように，身分上ユダヤ人は「王の動産」(the King's chattel) にすぎず，ユダヤ人の生命も財産も実は王の意のままになった。ユダヤ人に利潤を挙げるだけ挙げさせると，それを不当利益として召し上げる。彼らが「王の乳牛」(the royal milch-cow) と称された所以である。王は，債務者たる貴族からはユダヤ人業者を介して間接に上納させ，債権者たるユダヤ人からは，職業上・自治上の特権と引換えに，貸付金や冥加金（罰金）や特別税を徴収していた。ユダヤ人が王室に搾り取られる金は，貴族以下の臣民から年43.33%という高率で吸い上げた利子だから，[16] 当然彼らは国中で怨嗟の的となった。

12世紀初頭に入って，国王によるユダヤ人貸付業者の重用が教会と地方諸侯の反発を買い，その反発が第2次十字軍推進に伴う熱狂的な異教徒弾劾と呼応して，ついに1144年ノリッジのユダヤ人社会が「血の中傷」という濡れ衣を着せられた。ユダヤ人どもは復活祭を待ってキリスト教徒の幼児，つまりキリストに次いで純潔無垢な幼児を拉致し，イエスが受けたのと同じ拷問を加えた後，十字架に懸けて身体から血を抜き，その血を過越祭用の種なしパンに混ぜる，という途方もない言いがかりで，この暴挙にはローマの教皇も非難の声をあげた。「血の中傷」はやがてグロースター（1168）とベリー＝セイントエドモンズ（1181）のユダヤ人にも降りかかり，多くの犠牲者を出した。[17]

1189年リチャード1世は，戴冠式当日に，亡父の遺志を継いで十字軍出陣を誓い，式場にユダヤ人を入れなかったため，それを迫害の勅許と誤解した群衆が，見つけ次第ユダヤ人に襲いかかり，石造りのユダヤ人住宅に次々と火を放

Hosei University Repository

つなどして，30人前後のユダヤ人が殺された。リチャード1世は，即位早々王権を脅かすような不祥事が発生したことに怒ったようだが，全市あげての暴動だから，数知れぬ犯罪者を厳罰に処するわけにも行かず，「冒瀆的な不信心者を神に代わって懲らしめた者を法で裁くわけには行かない」ということにして，[18] 結局3人のキリスト教徒が絞首刑に処せられた。但しユダヤ人を殺した廉ではなく，一人は同じキリスト教徒の所有物を強奪したからであり，残りの二人は同じキリスト教徒の家屋に放火したからであった。[19]

第3次十字軍出陣の煽りで，反ユダヤ暴動は各地のユダヤ人社会に飛び火し，ダンスタブルではユダヤ人全員が強制的に改宗させられた。最も酸鼻を極めたユダヤ人殺戮は，1190年ヨークで起こった。ユダヤ人高利貸しへの膨大な負債を帳消しにしようと企んだ地方のバロンたちが，張本人であった。エルサレムへ出征するに先立ち，旅費に充てる財貨を主イエスの敵どもから掠めたのだといえば，咎められずにすむことは明らかであった。ある嵐の夜市内随所に放火して，住民の動きを封じた後，一味は襲撃にかかった。生憎ユダヤ人たちを保護する立場にある城の管理官が不在で，ユダヤ人全員がそのまま城の塔に籠もった。現場に駆けつけた管理官は，暴徒の仲間ではないかと疑われて中へ入れてもらえず，州長官に訴えたところ，長官はユダヤ人の越権に怒り人々に塔の包囲を命じた。ユダヤ人側には糧食も武器もなく，暴徒の刃にかかるよりはと指導者が全員自決を促した。マサダ砦の故事にならい，各家族で父親がまず妻子，次いで自身の首を掻き切って果てた。助けてやると説得されて出てきた何人かの生存者は，改宗を誓ったにもかかわらず，その場で殺された。バロンたちは，その足で大寺院へ行き，そこに保管されていた債務証書の謄本をすべて焼き捨てた。結局150名のユダヤ人が犠牲となり，住民側は約50名が罰金を課せられただけですんだ。[20]

ジョン王（在位1199-1216）は，当初ユダヤ人を王の庇護の下に置き，ユダヤ人同士の係争はユダヤ人法廷（Beth Din）の裁定に任せるなど理解を示したが，やがて財政不如意になると態度を豹変させた。たとえばあるユダヤ人に1万マークの罰金を課し，完済するまで毎日1本ずつ抜歯すると脅した。結局そのユダヤ人は，7本の歯を失った。片目をえぐられた者が少なくなかったから，“worth a Jewess' eye”（『ヴェニスの商人』2幕5場42行）という表現も生じた。[21] ジョン王が承認を迫られた「マグナ・カルタ」の第10条と第11条は，ユダヤ人に債務を負う者が死亡した場合，その遺族の債務弁済についての

Hosei University Repository

配慮を規定したもので，当然ユダヤ人債権者にとっては不利なものであった。[22] またジョン王がフランスの領土を失ったため，ユダヤ人はフランスとの交易を絶たれてしまった。

ヘンリー3世（在位1216-1272）の56年間にわたる治世の下でも，ユダヤ人に対する苛斂誅求はさらに悪化した。第4次ラテラノ公会議（1215）の議決を受け，イギリスは，ユダヤ人とキリスト教徒の商取引と交際を禁じ，1218年他のヨーロッパ諸国に先駆けて，十戒の二枚の石板をかたどった「ジュー・バッジ」の着用を強制した。税や罰金の滞納分は4カ月以内，しかもその半分は17日以内に完済し，完済を保証できない場合は投獄され，身代わりを立てない限り釈放されなかった。また期限内に完済しない場合は，すでに納めた分を没収するとともに，身柄と資産を王が召し上げてしまった。ユダヤ人を最も激しく憎んだ修道僧や，カオール人高利貸し（Cahors）でさえ，彼らの惨状を憐れんだという。

エドワード1世（在位1272-1307）の時代になると，ノルマンとサクソンの融合つまりイギリス化が進む。ユダヤ人にとっては，2つの敵が結束したようなもので，彼らの孤立はさらに深まる。王はユダヤ人の親だけでなく，子供にまで課税したし，教会はユダヤ人への食品販売を禁じたから，多くの飢死者を出した。ユダヤ人医師は魔法使いであるとして，まずキリスト教徒の治療，次いで一切の医療行為が禁じられた。高利貸付の利益をユダヤ人に独占させまいとして，教皇自身がカオール人など南仏や北伊の金融業者をロンドンへ進出させた。彼らはユダヤ人よりも法外な高利を貪ったという。1275年の「ユダヤ人に関する法令」で高利貸付を禁止されたとき，ユダヤ人はほぼ生計の道を絶たれたことになる。生活苦のあまり，貨幣変造（coin clipping）に手をつけると，ユダヤ人全員が投獄され，内263人が絞首刑の上四つ裂きに処せられた。[23] 教会が「ニュー・ストリート」に設けた改宗者施設へ行くのを潔しとしなければ，国外へ去る他なかった。エドワード1世としても，スコットランドとの戦いを控えて資金調達を迫られ，教会および一般信徒から申し出のあった15分の1税と引換えに，反ユダヤ一色の民意を汲んでユダヤ人の国外追放に踏み切らざるを得なかった。勿論これで，ユダヤ人の不動産と債権は，残らず彼の手中に収まったことになる。

ノルマン朝以来の王家とユダヤ人の関係を要約すれば，ユダヤ人のお蔭で王たちは意のままに富を累積し，王の臣民は交易，産業，金融，建築，医学，天

Hosei University Repository

文学などを習得できたのに反して，ユダヤ人の方は特権と資産を次々に剝奪され，やがて屈辱と迫害のなかで零落し放逐されてしまった。その数16,000人と当時の年代記作者は記しているが，現代の専門家は4,000人以下と踏んでいる。[24] いずれにせよ，海上で遭難したり，財宝を強奪されたりせずに無事フランスやフランドルへたどり着けた者は多くなかった。富裕な商人の一団がチャーターしたある船では，船長が干潮時にわざと砂州に乗り上げて客を降ろし，満潮になるや「海からモーゼを呼んで助けてもらうんだな」と言い捨てて，積み荷の財宝もろとも立ち去った。さすがにこの船長は見逃がされず，捕えられて縛り首となった。[25]

先述のとおり，改宗さえすれば居住を許されたので，相当数の「隠れユダヤ教徒」が残留したはずである。確実な史料として，「改宗者の家」（Domus Conversorum）に滞在した元ユダヤ人の数は1290年現在で男女合わせて80人，1305年現在で男23人，女28人という記録が残っている。[26] 王室や，勅許を得た貴族が，大陸からユダヤ人医師を招いたことも知られている。1492年スペインのユダヤ人大追放で，イギリスに避難した「旧ユダヤ人」（“once a Jew”）はかなりの数に上った。1290年の追放から1657年の再入国許可まで，イギリスの地を踏んだユダヤ人はいないとされるが，17世紀に入って書かれたある論文によれば，「多くのユダヤ人（“a store of Jewes”）がイギリスにいる。裁判所に数人，シティーには数多く，田舎にはもっといる」[27] 1594年ユダヤ人医師ロデリーゴ・ロペスがエリザベス女王の毒殺を図った廉で裁判にかけられていた頃，ちょうどマーロウの『マルタのユダヤ人』も上演中で，主人公バラバスの悪逆非道ぶりが，ロペス裁判の帰趨を決したとさえいわれた。[28] 時を同じくしてシェイクスピアも『ヴェニスの商人』を執筆中で，主役シャイロックに民衆一般のユダヤ人嫌悪が反映しないはずはなかった。イギリスの「隠れユダヤ人＝新キリスト教徒」たちは平穏な生活を送れたようだが，無論ユダヤ教徒的な振舞いなどで目立ちさえしなければ，の話である。ユダヤ教思想の再評価が始まるクロムウェルの時代まで，イギリス国民のユダヤ人像はバラバスやシャイロックと直結していたのだ。

Hosei University Repository

Ⅲ　文学的ユダヤ人像の形成——聖書劇から『ヴェニスの商人』まで

(1)聖書劇（mystery plays）

1290年の追放以来，原則的にはユダヤ人不在のイギリスで，なおも人々が好んで反ユダヤ的なカリカチュアを描きつづけたのはなぜだろうか。神学的反ユダヤ主義は，キリスト殺しのユダヤ人を諸悪の根源とみなし，パウロがユダヤ人にもギリシャ人にも共通としている諸々の罪悪を，[29] すべてユダヤ人の罪悪にしてしまった。信者にとっては，ユダヤ人を憎むことが信仰の強めにつながった。このスケープゴーティズムの実態を感じ取るには，まず当時の宗教劇，とりわけコーパス・クリスティ祝祭劇に目を向けるべきだろう。

コーパス・クリスティ祭とはキリストの犠牲と復活を記念する聖体祝日（聖餐感謝祭）のことで，教皇ウルバヌスの教書によれば「信仰者の心が主の受難を想起し，それによってもたらされた救いに，敬虔な歓喜の涙を流す日」なのである。聖餐（祭餅）が実際に生きたキリストの聖体に変化し，現に血がそこから滴り落ちるといった奇蹟・秘蹟を目の当たりにして，不信心者がキリストによる救済を受け入れるに至った，という説教は当時よく行われていた。[30] この聖体祝日にヨーク，チェスター，コヴェントリーなど当時の主要都市で，14世紀後半から約2世紀の間連綿と毎年上演されていた聖書劇が，コーパス・クリスティ・サイクル劇である。サイクルと称されるのは，天地創造から最後の審判までコヴェントリーの場合は24，ヨークの場合は50もの挿話を集大成しているからである。ヨークの全50篇のうち旧約聖書関係は11番までで，「受胎告知・懐任」から「最後の審判」まで残りの39篇がすべて新約関係なのは，この祝日の性格からして当然だろう。

サイクル劇は，当初教会内で上演されていたときでさえ，その性質上，聖堂の建築構造を巧みに利用した「多場式」だった。[31] やがて教会の庭，空き地そして市場へとはみだすにつれ，補助の俗人出演者がだんだんふえて，ついには僧俗の勢力が逆転してしまう。ミステリー劇の「ミステリー」は，神秘でなく，職業あるいは職業組合つまりギルドを意味した。たとえば「ノアの箱船」を演ずるのは船大工，「最後の晩餐」はパン焼き職人，「キリスト受難」は釘師という具合に組合別の分担が伝統的に決まっていた。ヨークでは，市内12カ所に公演場が設定されており，その12カ所を，50の組合が舞台用のワゴンとも

Hosei University Repository

ども巡回して，同じ劇を12回上演する仕組みつまり「巡行単場式」になっていた。したがって革鞣し業組合が最初の劇「ルチフェルの堕落」を早朝4時半に第1公演場で始めたとして，最後のグループ呉服商組合が「最後の審判」を第12公演場で終えるのは夜9時半頃になったらしい。初夏の一日，イエスの受難劇を中心とした14,000行に及ぶ人類の全歴史を，千数百人のさまざまな職人が上演するこのサイクル劇は，舞台装置，大道具，小道具さらに出演謝礼まで膨大な出費を要した。[32] しかしそれが全市民に与えた教化と娯楽も，測り知れぬものであっただろう。

教化よりも娯楽のほうに大きく傾いていただろうことは，驚倒すべき換骨脱胎や時代錯誤の頻出からも明らかである。たとえば箱船を作ったノアがやかましやの女房に悩まされたり，息子たちに「キリスト」の祝福あれと祈るし，最初の一神論者たるアブラハムが三位一体を云々するし，エジプト王からローマ軍の兵士まで「マホメットの血にかけて」誓ったりする。台詞が観衆に通じない分は，喧嘩打擲，罵詈雑言つまり仰々しい演技でカバーした。おそらく冷静無比な観察眼を具えていたからだろう，「ヨーク・リアリスト」として知られる氏名不詳の台本作者が，とくにユダヤ教主流パリサイ派のカヤパ，アンナス両大祭司，拷問人，ローマ軍兵士といった無数の脇役を配して，イエスに加えられた暴虐を緻密入念に再現した。その圧巻は何といっても「ヨーク35番」の磔刑シーンだろう。釘師たちの扮する4人の兵士が，釘打ちの技術を競い合うのだ。

兵士4「おまえたちを贖ってくださった人にかけて，ばっちり釘を打ち込め」
兵士1「合点だ。ここに丈夫な掛け釘がある。これなら骨も筋肉もぶっ通す。絶対うまくいく。おれが保証する」
兵士2「ねえ先輩，面白くてやめられねえよ」
兵士3「右手はいいが，左手がちいとばかり穴に届かん。筋肉が縮まっちまったんだ」[33]

兵士役の釘師自身が，ストレスに耐えられず失神することもあり，観衆のなかには，あまりの衝撃で気が触れてしまう者も出た。コヴェントリー・サイクルでは，イエスを十字架に懸けた後，その周りでユダヤ人役の連中がグロテスクな乱舞に耽ったという。[34]

キリスト教側からすれば，このように獣性よりもっと恐ろしい人間の残忍性を余すところなく見せつけるシーンも，やがてイエスの贖罪による救いの絶対

Hosei University Repository

性を実感させるための準備段階という儀式的意味があるのだろう。たしかにサイクル劇では，喜劇とも残酷劇ともつかぬ羽目を外した遊戯性が舞台を支配していたが，半面，聖体祝日との密接な関係は断ち切れず，あくまでもローマ・カトリック教会と結びついたものであった。ヘンリー8世以来の宗教改革でカトリック僧院が廃止・没収され，エリザベス女王は即位後2年目に，宗教上の最高権威者として，全国民に新しい国教への服従を強制した。したがって聖母マリア崇拝などカトリック色濃厚だったサイクル劇の上演も，徐々に抑制されることになった。しかしエリザベス朝演劇と共存していたことは事実であり，「2世紀余にわたってイギリス演劇の土着伝統でありつづけたこの劇が，シェイクスピアとその観衆の背後に存在しなかったとは考えられない」[35]

イギリスでは，このように衰退してしまったが，1634年以来バヴァーリアのオーベルアマーガウでは，全村あげての大がかりな受難劇が10年毎に催され，イギリス中世のサイクル劇同様，主イエスを殺したために神の恩寵を失い，永遠の屈辱と流浪を余儀なくされたユダヤ人というフィクションをいまだに再現しつづけている。[36] 中世のイギリスやドイツで行われていた信仰，そしてその産物たる宗教劇は，あくまでも当時の環境，とりわけ罪，許し，救いというキリスト教信仰の本質を斟酌しながら考察すべきで，現代だからこそ通用するような批判を加えることは無意味だ，という立場もあろう。受難劇は，そのクライマクスで観衆が罪深い人類の一員として悔悛の情を抱くことを建前とはしたが，実際に観衆の一人一人が，自分もあのような状況に置かれたら，イエスの敵と同じような行動をとったかもしれない，と感じてこそ悔悛の情らしくもなろう。しかしユダヤ人が，黒の麻布を纏い，血に飢えたサディスト，悪魔の手先としてイエスを集団的に迫害するという一方的演出であれば，生身のユダヤ人を見たこともなく，彼らの歴史を知るすべもない観衆は，なによりも激烈な反ユダヤ的イデオロギーを植えつけられただろう。中世以来ユダヤ人を悩ましてきた一方的な謬見・偏見，またそれに基づくグロテスクな表現表象がそのまま文学や美術に盛られ，本質的に同様な謬見・偏見がいつまでも温存されているとしたら，バランスを保つ意味からも，受難劇，というよりはその根源である福音書の内容をユダヤ人側がどう見ているのか，概観して置く必要があろう。

*　　*　　*

まずイエスの教えには，ユダヤ教の「ミドラッシュ」（律法解釈）が反映しており，律法学者やパリサイびとを痛烈に非難したことはあったにせよ，「律

Hosei University Repository

法」に対するイエスの敬意は福音書にさえ窺われる，というのである。イエスの教えのすべてについて，ユダヤ教の聖典から該当部分を引証できるくらいだが，ただイエスは，倫理そのものに集中しすぎるという点で「非ユダヤ的」だった。「汝の敵を愛せ」というよりも「よそ者に親切であれ」という方が，社会改善に適した実際的な律法解釈ではないか。さらに，遠からず神の国が奇蹟によって出現し，神の恩寵に預かった兄弟たちの手で，現世のあらゆる道徳的・社会的問題は消滅するだろうという「非現世的」な信仰こそ，「現世的」なパリサイびとの反発を招いた原因ではないかとする。[37]

この説は，当時ユダヤ人の生活に瀰漫していたさまざまな神秘的，黙示的思想を捨象しているきらいがあるけれども，彼らが同時にローマの苛酷な統治に抵抗していたという事実は重要である。キリスト教徒の一学者が，政治的反逆者としてのイエス像を描いた。[38] つまりイエスの影響力を抑止して法と秩序を維持しようとしたのは，ユダヤ人ではなくローマの支配者であったということになる。またこれと関連して，ユダヤ人学者の間から，福音書中に出てくるイエスとパリサイ派の反目は歴史的事実ではないという説や，[39] たとえ律法解釈上の相違はあっても，パリサイ派が組織としてイエス謀殺の計画や実行に加担した証拠はないという説が出ている。[40]

勿論福音書作家としては，同胞たるユダヤ人に憎悪され犠牲となったイエス像にあくまでも執着せざるを得なかった。彼らの念頭にあったのは，イエスの死と復活における神の顕現，そしてイエスの再臨による神の国の到来であり，これを抜きにして福音書の物語はあり得なかった。しかし記憶や伝説を利用しつつ十字架に至るいきさつを述べる際，終始彼らの脳裏を離れなかったのは，イエスの死の責任をローマ人に負わせてはならないという一事であった。彼らが執筆していた紀元50年頃から100年頃までのローマは，ネロやドミティアヌスといったキリスト教徒迫害で歴史に名を残した暴君らの統治下にあり，帝政の批判に当たるような記事でさらなる弾圧を被るのは憚られた。福音書作者のなかでもルカはピラトの残忍性を証明しているし，アレキサンドリアのフィロンも彼の「腐敗した統治，裁判なしの処刑，傲慢不遜な言動，絶えることなき残忍性」をあげている。[41] 絶対的権力を振るっていた彼が，ユダヤ人指導層の要求に屈するとは考えられない。したがって，ピラトが公正を慮って優柔不断となり，ユダヤ人群衆の圧力に絶えかねているような受難劇の演出は，事実から程遠いというのだ。

Hosei University Repository

さらに福音書作者たちは，パリサイ派の教えを直接理解していたわけではないから，イエスの教えを挿みながら，それがいかにパリサイ派的であるかに気づかなかった。支配者ローマの手先となってイエスの伝道に干渉したのは，パリサイ派よりむしろサドカイ派，つまり宗教面での保守性と実生活面での世俗性を特徴とするサドカイびとだったとする向きもある。[42] 同等の人間同士として実践すべき隣人愛，いわゆる「黄金律」は，イエスだけでなく彼と同時代の偉大なパリサイ派ラビだったヒレルによっても説かれているし，さらに深いところでイエスの神への愛も，ヘブライ預言者らの精神を活かそうとしていたパリサイ派の精神に合致するものだという。キリストの神性に関してはともかく，福音書に盛られた道徳的な教えを，ユダヤ人は妥当なものと考えている。ただ，その教えを反パリサイ的な憎悪と結びつけるのは止めてほしい，と願っているのだ。

(2)「女子修道院長の話」（チョーサー）

チョーサーの在世期間は1340年頃から1400年までとされるから，彼の詩には14世紀イギリスの生活と思想そしてユダヤ人観も反映しているはずである。チョーサーの作品を通じてユダヤ人にふれている箇所は，『コンコーダンス』中の 'Jewry' および 'Jew' という2項目についてみると22例に達する。その内20例が『カンタベリー物語』に含まれ，その半数の10例はその第16話「女子修道院長の話」("The Prioress's Tale") に出てくる。[43] 彼が生まれる50年前にユダヤ人はイギリスから追放されていたので，イギリス本国で生身のユダヤ人に出会ったことはないかもしれない。しかし軍人や外交官の資格でフランスやイタリアに旅しているから，その折りに遭遇した可能性はある。先述のとおり，「血の中傷」や「儀礼殺人」の噂は12世紀中葉以来イギリス中に流布しており，フォークロアの中でユダヤ人がとりあげられることは珍しくなかった。ユダヤ人なしでも反ユダヤ主義は盛んであった。1394年にユダヤ人がフランスから追放されたことも，イギリスで話題になっていたことだろう。

29人の巡礼中，話の途中で断片的に触れるというのでなく，話のなかの悪役として，それもサタン的悪役としてユダヤ人を持ち出してくるのは，「素直で恥じらうばかりの微笑みを浮かべた」("That of hir smyling was ful simple and coy") エグレンティーンという名の女子修道院長である。[44] 舞台は小アジアのある大きな町に設けられたユダヤ人ゲットー，つまり「キリスト様とキ

Hosei University Repository

リスト様に従う者とには厭わしい，あの忌むべき金貸業や道ならぬ金儲けのための区画」（“For foul usure and lucre of vileynye,/Hateful to Crist and to his compaignye”）であった。舞台が小アジアに設定されているのは，すでにユダヤ人がイギリスでは現実性に欠ける存在であったことの証明になるけれども，彼らの不在で，過去の歪められた伝説と歴史が忘れ去られるとか，その悪評が薄らぐということはなかった。要するにチョーサーは，ユダヤ人追放の前後を問わずイギリス人にとってごくおなじみだった題材を用いているのである。

ある寡婦の一人息子が，日々登下校の際にそのユダヤ人居住区を通りながら「救い主の恵み深き御母よ」（Alma redemptoris mater）という聖歌を楽しげに大声で歌い続けていたら，「私どもの最初の敵であり，ユダヤ人の心の中に雀蜂の巣を構えていたあのサタンという大蛇」（“Oure firste foo, the serpent Sathanas, that hath in Jues herte his waspes nest”）が鎌首をもたげて，「こんなことをさせておいていいのか」とけしかけた。ユダヤ人どもが雇った殺し屋は，この7歳のおさなごの咽喉を切り裂き，肥溜めの穴に放り込んだ。不安と恐怖の一夜が明けるや，母親は聖母の御名を呼ばわりながら，ユダヤ人の間を捜しまわり，ふとその穴の近くで息子の名前を呼ぶと，おさなごは，咽喉を切り裂かれて仰向けになったまま「アルマ・レデムプトリス・マテル」を朗々と歌い始めた。駆けつけた奉行は，関係したユダヤ人を全部荒馬に引きずらせ，縛り首にした。おさなごを埋葬しようとして，遺体に聖水を振りかけると，また聖歌を歌い始めるので，大修道院長がわけを尋ねた。聖母様が舌の上に一粒の真珠を置いて下さったためだというので，舌を引き出してその粒を取り去ると，おさなごは静かに息を引き取った。居合わせた全員が石畳の上にひれ伏して，泣きながら尊いキリストの御母をほめたたえた。

ここで話は終わらず，エグレンティーン尼は，よるべなき罪人たる私どもを天主がより慈しみたまうようにと，「（ついせんだって）同様の殺され方をされたリンカンの幼いヒュー様」のとりなしを祈願するのだ。小アジアの町で，またリンカンで処刑されたユダヤ人に対する憐れみを彼女に求めることは，ユダヤ人を一点の疑いもなく悪魔とみなしているのだから無理な注文である。何しろ修道尼は毎日第三時課の祈禱のなかで，「バラバを救って，イエスを十字架に懸けろ」と叫ぶ邪まなユダヤ人どもを懲らしめなければならなかったのだから。[45] ところで，聖ヒューが埋葬されたというリンカンの大寺院に，1928年

Hosei University Repository

次のような碑銘が据えつけられた――「……このような（ユダヤ人が幼いキリスト教徒に儀礼殺人を犯したというような）フィクションは，キリスト教国の名誉に寄与しない。したがってわれわれはかく祈ろう――『主よ，われわれの犯した罪も，またわれわれの先祖が犯した罪も憶えたまうな』と」[46] 1255年に「幼いヒュー様」を殺した廉で処刑された18名のユダヤ人は，7世紀を経てやっとその冤罪を雪いでもらえたことになる。

チョーサーは「女子修道院長の話」を通じて反ユダヤ主義を焚きつけた，という類の批判が，チョーサー愛好者にとって不愉快なことは当然である。しかし人権問題がかまびすしい昨今では，往時のキットリジやチェスタトンのように，まったく取り合わないですますわけにもいかない。チョーサーを反ユダヤ主義から救うためには，それをエグレンティーン尼にかぶせるのが手っとり早いけれども，時代的・地域的条件は致し方ないという立場をとることもできる。何しろ中世の歴史観というのは奥行きが縮んでいて，1390年当時のユダヤ人と，イエスを嘲って責め苛んだ40世代以前の彼らの先祖とが，中世人の精神内部ではすぐ融合してしまうのだと説明すれば，女子修道院長だけでなくチョーサーをも同時に救出できる。[47] パウロから南北戦争のリー将軍に至るまで，善きキリスト教徒たちが奴隷制度を可としていたではないか，という弁護と一般である。登場人物や著者ではなく，当時の体制が問題であり，エグレンティーン尼を責めるなら，むしろ全巻の最後で滔々たる大説教を展開する司祭こそ責めるべきである，ということになろう。また教会の篤信者ならば，この話の本筋は反ユダヤ主義ではなく，あくまで聖母マリアの奇蹟であると主張するだろう。

しかし聖母マリアの奇蹟と関連した当時の諸稿本が，必ずしも反ユダヤ主義一色ではないことを指摘する学者もいる。R.W.フランクによれば，各国語で書かれた27種の稿本中，まったく反ユダヤ主義と無関係なものは3種だけだが，27種全体に含まれた数百の物語中，反ユダヤ的内容のものは9％にすぎなかったという。[48] 少くとも，聖母奇蹟譚が文学的慣習として反ユダヤ主義を伴う必然性はない，という証明にはなろう。それなのに，チョーサーが敢えて両者を結びつけたのはなぜか。彼は自分の考えを明々白々に語るような作家ではなく，シェイクスピア同様相異なる解釈の余地を残しているから，とてもエグレンティーン尼の反ユダヤ主義を単純に彼の思想と結びつけるわけにはいかない。彼は女子修道院長にフィクションを語らせながら，同時に紛うことなき事

Hosei University Repository

実をも語らせている。ゲットー，高利貸し，「血の中傷」は歴史的事実である。献身と偏見が奇妙に混じり合ったエグレンティーン尼の「危険な清純さ」には，フィクションと事実をごたまぜにしてしまう未熟な「子供女」の特性が窺われる。聖母マリアへの献身を説きながら，同時に他宗に対する仮借なき憎悪に浸るこの「純真」な尼僧を介して，チョーサーは，宗教的熱狂に伴う危険を暗示していたのではなかろうか。とくに無知と迷信と宗教が入り交じっている時代となれば，「純真」は必ずしも美徳につながらないのだ。

シェイクスピアの『ヴェニスの商人』と同様，チョーサーの「女子修道院長の話」についても，著者の反ユダヤ主義如何をめぐって，果てしない議論の攻防が続くことだろう。いずれにせよチョーサーのこの作品は，聖母奇蹟譚を世界文学の水準にまで引き上げてしまった。聖母奇蹟譚が人気を失って目立たなくなったとしても，「女子修道院長の話」は，偏見で固められた古いユダヤ人像を後々の世まで伝えることだろう。このことだけは疑いようがない。

(3)バラバスとシャイロック

マーロウ作『マルタのユダヤ人』(1590年頃初演)が当時の観衆から人気を博したのは，まず第一に高利貸しに対する彼らの反感という時流に投じたからだろう。16世紀後葉のイギリスで高利を貪っていたのは，3世紀前に追放されたユダヤ人でなく，キリスト教徒の業者だった。同宗の信徒たちから小金をまきあげる謀利輩どもが，この呪うべき陋習の元祖ユダヤ人に結びつけられたことは，多少のうさ晴らしにはなった。また初演から数年後の1594年に，ユダヤ人医師ロデリーゴ・ロペスが女王の毒殺を図ったとして処刑されたため，ユダヤ人の汚名にさらに毒殺者の一語が付け加わった。マーロウの新作の主人公バラバスは，まさに当時のイギリス国民が最も嫌悪していた高利貸しと毒殺という両悪を兼ね具えた不信心のユダヤ人，いわばカフタンを身にまとったチェーザレ・ボルジアだったから，空前の当たりをとったのである。名前が，イエスの代わりに釈放された盗賊バラバに似ていたことも，興味をそそる一因だった。裏切りに明け暮れるこの「ステージ・ジュー」は，イエスを銀30枚で売り渡したという最悪の裏切り者イスカリオテのユダと同様，燃えるように真っ赤な髪，同じ色の巨大な鼻といういかにも悪魔的な扮装で登場する。

マルタ島の総督がトルコから滞納貢税10年分の支払いを迫られ，島のユダヤ人に資産の半分を支払うか，さもなければキリスト教に改宗せよという難題を

Hosei University Repository

押しつける。その両方を拒んだバラバスは，全財産を没収された上，屋敷は尼寺に変えられる。娘アビゲイルを修道尼として潜入させ，屋敷内に隠してあった財宝を持ち出させた彼は，復讐の鬼と化して邪魔者を一人残らず謀殺あるいは毒殺していく。愛人を父に謀殺されたアビゲイルが本気で尼寺へ引きこもると，娘もろとも修道尼全員に毒粥をすすらせもする。トルコ側に内通して島の総督となるや，今度はキリスト教徒側を誘い，どんでん返しの床を仕掛けてトルコ王子らの壊滅を図るが，老獪な元総督の手で，その仕掛けを逆用され，落ち込んだ大釜のなかでドン・ジョヴァンニ的最期を遂げる。生身の人間というより神学的虚構の塊が消えたにすぎないから，同じ権謀術数で競り勝った元総督が，幕切れで「宿命や幸運でなく，天なる神にしかるべき賛辞を捧げよう」と呼びかけても，その反響は虚ろである。

シェイクスピア作『ヴェニスの商人』(1596年頃初演，1600年出版）は，表題のキリスト教徒商人アントニオから常日頃犬呼ばわりされ，上着に唾を吐きかけられたこともあるユダヤ人高利貸しシャイロックが，相手の借金返済不履行を楯に，契約通り心臓近くの生肉1ポンドを切り取ろうとし，ポーシァ扮する裁判官からキリスト教徒の血を一滴たりと流せば死刑だと釘をさされて，復讐の企みを挫かれた，という「未必の殺意」中心のプロットからなる。バラバス同様冷酷な高利貸しだし，やはり復讐の鬼と化したシャイロックではあるが，「マルタのユダヤ人」のように権謀術数の限りを尽くして次から次へと計画的殺人に耽る没人間性は免れている。

一世を風靡していたマーロウの芝居とその題材に，シェイクスピアが刺激されたことはあり得よう。実際に台詞を比べてみて，金儲けや財産に対する礼賛，娘に対する愛憎の表現などに似通った点があるにはあるし，両方とも，道徳劇の慣例通り道化的下僕を置き，観衆の嘲笑を主人たる悪魔に振り向けている。またキリスト教徒とユダヤ人の間に緊張関係があり，キリスト教徒側はユダヤ人を財源として必要としていながら，まっとうな人間として扱わないという共通点もある。しかし2人の高利貸しを並べた場合，バラバスは超民族的，いやむしろ超人的な悪の権化であって，無神論者マーロウが似而非ユダヤ人をマウスピースに仕立て，心行くまでキリスト教体制の偽善を論駁しようとした結果とも思われる。道化と同じで，悪魔と決まった役が吐く台詞なら，どんなに耳障りな悪態でも検閲にひっかかることはない。マーロウがバラバスのユダヤ性に十分配慮していなかったことは，彼の口から “Corpo di Dio！” (「おお

Hosei University Repository

神の聖体よ」1幕2場90行）などとユダヤ教徒に最も縁遠い禁句を吐かせているのをみても明らかである。たとえユダヤ人の観客でも，このバラバスに魅了されることはないだろう。

反面，もともと債鬼であり，それが復讐鬼となってもう一歩で悪魔になれそうなシャイロックだけれども，周囲の理不尽ないやがらせに対する彼の反発には，大半のユダヤ人が共感するだろう。1827年ロンドンでキーン扮するシャイロックを観ていたハイネは，裁判の場の幕切れで，近くにいた白皙のイギリス美人が涙ながらに「哀れな男にひどい仕打ちだわ」（"The poor man is wronged!"）と繰り返しているのを耳にした。[49] 現代イギリスの作家マンコウィッツも，「僕はユダヤ人で物書きだが，人間でもある。僕だって，シェイクスピアの台詞じゃないけど，刺されりゃ血が出ますよ」と彼の『ヴェニスの商人』論の冒頭で述べている。[50]

勿論マンコウィッツは，3幕1場の「ユダヤ人には目がないか。手がないか……感覚，感情，情熱がないとでもいうのか。キリスト教徒とどこがちがう」という有名な慨嘆を念頭に置いている。シャイロックはここでユダヤ人全般の慨嘆を代表している。アントニオに対する彼の憎悪は，まさにユダヤ人代表としてキリスト教徒の偏見に向けられたものである。高利貸しが悖徳だというけれども，ユダヤ人に対してこの職業を押しつけたのはそもそもキリスト教社会ではないか。バラバスもシャイロックも娘に対してはひどい父親だったといえるが，シャイロックのジェシカに対する愛情は分かりきったもので，バラバスのアビゲールに対する無残な仕打ちとは比較を絶するものである。そのジェシカが財宝ともどもキリスト教徒の手に落ちたことで，はじめてシャイロックは怪物と化し，あの奇妙な契約の実現に狂奔するのだ。いかに虚構とはいえ，当時のヴェニスの公証人がこんなたわけた契約を認めるはずはなく，すでに行われていた海上保険をかけずに，持ち船を出港させる船主がいたとは思われない。[51] たとえいい加減な虚構に基づいていても，その虚構の中に意味を探るのがゲームのルールだから致し方ない。

ユダヤ系のある学者は，劇中でシャイロックが「ジュー」あるいはその関連語で呼ばれたのは74回，本名で呼ばれたのは17回にすぎず，これは彼を非人格化する企てであると指摘する。[52] またアントニオの返済不履行が決定的となった後で，シャイロックがユダヤ人仲間のテューバルに訴訟の手続きを頼みながら，シナゴーグで待っているぞと告げる言葉こそ，最も深い意味で反ユダヤ的

Hosei University Repository

であると強調する。[53] 「血の中傷」以来イギリス人の心のなかでは，シナゴーグといえば儀礼殺人のイメージと結びついてきたからに他ならない。結局『ヴェニスの商人』は反ユダヤ的な劇で，それを書いた作者が反ユダヤ的とは思えないけれども，あるいは金銭的そして芸術的な目的のために，旧来の反ユダヤ的ステレオタイプを進んで用いたという可能性はあろう。

キリスト教側からすれば，愛する友人のために財産も生命も捧げようとするアントニオは，致富欲で人間関係とりわけ娘との関係まで毒してしまうシャイロックとは対照的なキリスト教的美徳の具現者である。金と銀の虚飾を見抜き潔く銅を選んだバッサニオ，不正な父の許を去り敢えてキリストの救いを求めたジェシカは，いずれも神の寵愛をうけるに相応しい。とりわけ律法遵守一本槍のシャイロックを，律法のより厳密な解釈で決定的な敗北へと追い込み，慈悲の恩恵をあの怪物の石の心に染み込ませたポーシャは，キリスト教的価値体系の勝利を確かなものにした。「ユダヤ人に目はないか……」云々の名台詞も，劇全体からみれば，寛容や慈悲を乞う嘆願よりも復讐の主張と考えられる。W.D.スミスによれば，ちょうどロミオとジュリエットが，二人の不幸を真の原因である家族間の不和でなく星回りの悪さのせいにしているのと同様，シャイロックも，無害な相手（“innocent opponents”）にユダヤ人独特の偏見を浴びせ，自分の高利貸しとしての非行を正当化しているのだという。[54] クィラー＝クーチのように，シャイロック論議は哲学過剰，感傷過剰だという向きもある。他ならぬシェイクスピアを反ユダヤ主義から絶縁させようとする傾向は，絶えることがないだろう。

勿論キリスト教側にも，シャイロックを絶対悪，善きキリスト教徒の引き立て役とだけみなす独善に対しては異論がある。J.R.クーパーによれば，シャイロックはその情熱ゆえにベルグソンの「機械的なおかしさ」というカテゴリーでは収まりがつかないタイプ，つまり以前の喜劇的人物とはちがい動機をはっきり意識して行動するタイプだという。「かりにユダヤ人がキリスト教徒をひどい目に会わせたとする，それにたいする忍従の道とはなんだ。復讐だ」——このシャイロックの言葉は人間の行動をあまりにも正確に述べており，とても彼独特の欺瞞的修辞とは呼べない。忍従に徹することが，古き律法に対するキリスト教倫理の優越性を示すとすれば，まさにキリスト教徒はこの点で失敗している。この劇には生きた人間観察があり，とても二分法的な解釈では立ち行かない。シャイロックは単なる喜劇的悪漢ではなく，観衆が心して

Hosei University Repository

その主張に耳を傾けるべき人物なのだ。ユダヤ教徒もキリスト教徒もともに罪の子なのだ，という覚醒がクーパー論文を一貫している。[55]

ユダヤ人側からは，何よりも『ヴェニスの商人』を教材に使ってくれるな，もし使うとしても上演史を考慮した上で，シャイロック，ジェシカ，テューバルといったユダヤ人キャラクターに同情的な解釈を重視せよ，ということになる。[56] 1964年の第2ヴァティカン公会議で，ユダヤ人は「キリスト殺し」の汚名を雪がれ，またドイツの敬虔なプロテスタントで，大学教授と作家を兼ねるワルター・イェンスは，『ユダの弁護人』を著して，フィクションの形ながら，イスカリオテのユダが表敬に値することを訴えた。ユダは神から要求されたことを果たしたまでだ，というのである。[57] しかし全般的にいって，キリスト教諸国の反ユダヤ主義は依然として盤根錯節，ユダヤ人が愁眉を開ける日は程遠いから，シャイロックと渡り合うキリスト教徒の各登場人物に対する彼らの反応は厳しい。ポーシャは冷淡で俗物的な意地悪女，バッサニオはけちな日和見的冒険者，ロレンゾーはそこいらの泥棒，そしてアントニオつまり「ヴェニスの商人」自身は本業よりも同性の愛人バッサニオを失うことに気もそぞろな阿呆紳士ということになる。[58] シャイロック罵倒が生き甲斐みたいなグラシアーノに対しては，おそらくどのユダヤ人も，ナチス親衛隊の三下という印象を持つだろう。

現代イギリス屈指の劇作家でやはりユダヤ系のアーノルド・ウェスカーも，「自分はシャイロックのように肉1ポンドを求めはしないけれども，この劇が世界の乱視的ユダヤ人観とやりきれないユダヤ人憎悪に寄与しているのは許せない」と宣言し，[59] 自ら『商人』を執筆して，より人好きのするシャイロックを描き出した。シャイロックとアントニオは学問を通じて結ばれた無二の親友で，周囲の反ユダヤ主義ゆえにむしろ友情が強められるという関係だ。原作通り，バッサニオが無心に来て，アントニオがシャイロックに助けを求めると，シャイロックは即刻これに応じ，証文など不要という。ところが法律上ユダヤ人との取引には証文が必要だと聞かされ，その法律を嘲弄するつもりで，例の肉1ポンド云々という契約を書き込んだ。原作通りの進行で返済不履行となり，法律の出番となる。しかしシャイロックが「ダニエル様の再来だ」と狂喜するのは，「生肉を切り取ってよい」という許しが出たときでなく，「血を一滴たりと流してはならぬ」と釘をさされたときである。「ユダヤ人に目はないのか……」というシャイロックの十八番は，何と裁判の場でロレンゾーの口か

Hosei University Repository

らシャイロックの弁護として飛び出す。そしてシャイロックは「わたしが人間であることを何も君に主張してもらうつもりはない」と突っぱねる。ウェスカーが描こうとしたシャイロックは，自由な精神としてのユダヤ人である。

これに反してシェイクスピアの描いたシャイロックは，被差別者の礼儀は弁えながらも辣腕と毒舌の限りを尽し，それに反発したキリスト教徒の面々からいじめ抜かれ，それがまた彼の復讐心を煽り，というダイナミックな構成を伴っていた。侮辱とそれに対する復讐というメカニズムのなかで，当時の観客はユダヤ人憎悪を強めたのだろうし，現代の観客はおそらく反ユダヤ主義を見直すのだろうから，シャイロックの半悪魔性を剝落させることは，むしろウェスカーの意図に反するともいえる。ブロードウェイで結局『商人』が8回の試演と4回の公演しか打てなかったのは，自由闊達なシャイロックだと，いかに絢爛たる名言至言が飛び交っても所詮対話篇で，劇的迫力に欠けると判断されたからだろう。

山内昌之氏は近著『ラディカル・ヒストリー』のなかで，カフカース・イスラムの悲劇的英雄ハジ・ムラートを扱ったトルストイの小説にふれ，「創作と史料との関わりを考えるなら，主観的な態度を隠さないトルストイのハジ・ムラート解釈の方が，多数の史料を使って客観性を誇るモルドフツェフのハジ・ムラート像よりも，ロシヤ人とロシヤ社会の持つ他民族への偏見や差別の構造をはるかに挑発的に照らし出した」と述べている。[60] ステレオタイプに左右されない人間観察の直観的能力こそ，大作家に欠かせない条件だということがよく分かる。チョーサーとシェイクスピアは，現代的視点からすれば偏見の弁別に物足りない面があるにせよ，ともに透徹した人間観察で図らずも周囲の独善と偽善をけっこう挑発的に照らし出したのである。

（付記）この論文は，平成3年度文部省科学研究費補助金によるリサーチの一部をなすものです。

注

1) 『聖書』からの引用は，日本聖書協会新共同訳（1987）に拠る。

2) *cf.* Samuel Sandmel, *Antisemitism in the New Testament* (Fortress Press, 1978) p. 10. ユダヤ教の立場からは「人は罪を犯す，しかし人は償うことができ，神は許すことができる」ということになり，キリスト教の立場からは「人は罪に縛

Hosei University Repository

られているけれども，キリストが人を償い，それで人は許される」ということになる。

3) 和辻哲郎，『原始キリスト教の文化史的意義』（岩波書店，1971）p．68.

4) *ibid.*, p. 123.

5) Joel Carmichael, "Mystical Anti-Semitism and Xenophobia," *MIDSTREAM* (April 1986) pp. 14–15.

6) James Parkes, *The Conflict of the Church and the Synagogue* (The Jewish Publication Society, 1961) p. 373.

7) 半田元夫，『血と十字架』（人物往来社，1967）pp. 223–226.

8) W. A. Meeks & R. L. Wilken, eds., *Jews and Christians in Antioch in the First Centuries of the Common Era* (Scholar Press, 1978) pp. 87–90 as quoted in W. Hallo et al, eds., *Heritage: Civilization and the Jews* (Praeger, 1984) pp. 75–77.

9) St. Augustine, *The Writings Against the Manicheans*, in *A Select Library of the Nicene and Post-Nicene Fathers of the Christian Church* (Eerdmans) vol. 4, pp. 186–188 as quoted in *ibid.* pp. 77–79.

10) Ruth Mellinkoff, *The Mark of Cain* (Univ. of California Press, 1981) p. 99.

11) 上記(9)のヒッポの聖アウグスティヌスとは別人。

12) A．ジェラール，『ヨーロッパ中世社会史事典』（藤原書店，1991）p．103.

13) Jonathan A. Romain, *Anglo-Jewry in Evidence* (The Michael Goulston Educational Foundation, London, 1985) pp. 11–12.

14) 藤田重行，「中世イギリスにおける高利貸資本—12，3世紀のユダヤ人の活動を中心として」，『経済と経済学第10・11合併号』（東京都立大学経済学会，1963年）p．219.

15) 同上，p．221.

16) 湯浅赳男，『ユダヤ民族経済史』（新評論，1991）p．169.

17) *The Universal Jewish Encyclopedia* (UJE Inc., 1941) England の項。vol. 4, p. 110

18) William of Newbury, *Historia Rerum Anglicanarum* (Howlett, ed., vol. 1, p. 294) as quoted in Romain, *op. cit.*, pp. 37–39.

19) *ibid.*, p. 40, note 5.

20) William of Newbury, *op. cit.*, p. 312 as quoted in Romain, *op. cit.*, pp. 41–44.

21) H. Michelson, *The Jew in Early English Literature* (Hermon Press,

Hosei University Repository

1972; first published in 1926 in Amsterdam) p. 25.

22) Romain, *op. cit.*, p. 47.

23) *UJE*, vol. 4, p. 112.

24) *Encyclopedia Judaica* (Keter, 1972) England の項。vol. 6, p. 751.

25) Holinshed, *Chronicles* (An. Dom. 1290. An. Reg. 18) as quoted in Edgar Rosenberg, *From Shylock to Svengali* (Stanford Univ. Press, 1960) p. 315.

26) Bernard Glassman, *Anti-Semitic Stereotypes Without Jews—Images of the Jews in England 1290-1700*, (Wayne State Univ. Press, 1975) p. 45.

27) T. Boas, *Shakespeare and His Predecessors*, p. 216, as quoted in Michelson, *op. cit.*, p. 39.

28) Cecil Roth, *A History of the Jews in England*, p. 144.

29) たとえば「ローマの信徒への手紙」1：29-31に羅列された罪悪。

30) 奥田宏子『中世英国の聖書劇—神と人へのスペクタル』(研究社, 1984) p.53.

31) 木方庸助「演劇の起源」,『英米文学史講座1　中世』(研究社, 1962) p. 111.

32) R. Beadle & P. King, *York Mystery Plays* (Oxford, 1984) General Introduction xii-xiv.

33) 石井美樹子訳『イギリス中世劇集—コーパス・クリスティ祝祭劇』(篠崎書林, 1983) p.355. 前掲書 (32) に記載の原文は次の通り (兵士の番号が石井訳と異なる)。

1 Soldier: Strike on then hard, for him thee bought.

2 Soldier: Yes, here is a stub will stiffly stand,/Through bones and sinews it shall be sought—/This work is well, I will warrand.

1 Soldier: Say sir, how do we there?/This bargain may not blin.

3 Soldier: It fails a foot and more,/The sinews ar so gone in.

34) M. J. Landa, *The Jew in Drama* (KTAV, 1969, first published in 1926) p. 39.

35) 奥田宏子, 前掲書, p.59.

36) *Encyclopedia Judaica* (Keter, 1972) vol. 7, p. 443, German literature の項。

37) Chaim Raphael, *A Coat of Many Colours*, (Chatto & Windus, 1979) pp. 161-162.

38) *ibid.*, p. 163. この箇所は, S. G. F. Brandon, *The Fall of Jerusalem and the Christiam Church* (1951) に拠っている。

39) *ibid.*, p. 163. この箇所は, Paul Winter, *On the Trial of Jesus* に拠っている。

40) *ibid.*, p. 165. この箇所は, G. Vermes, *Jesus the Jew* (1973) に拠っている。

Hosei University Repository

41) Philo, *Legatio ad Gaium* as quoted in Judith Hershcopf Banki, *The Oberammergau Passion Play, 1980* (The American Jewish Committee, 1980) p. 13.

42) Banki, *ibid.*, p. 12. この箇所は，Eugene Fisher, *Faith Without Prejudice: Rebuilding Christian Attitudes Toward Jews* (1977) に拠っている。

43) Allen C. Koretsky, "Dangerous Innocence: Chaucer's Prioress and Her Tale," Derek Cohen & Deborah Heller, eds., *Jewish Presences in English Literature* (McGill-Queens Univ. Press, 1990) p. 17.

44) 以下の引用部分は，生地竹郎著『十四世紀の英文学』（文理，1976）所収の全訳（pp. 36-46）を参考にした。

45) Albert B. Friedman, "The *Prioress's Tale* and Chaucer's Anti-Semitism," *The Chaucer Review* 2 (1974) p. 124

46) Romian, *op.cit.*, p. 31,

47) Friedman, *op. cit.*, p. 120.

48) Koretsky, *op. cit.*, p. 18.

49) Henry Regensteiner, "Heine on Shylock," *MIDSTREAM* April 1991, p. 38.

50) Wolf Mankowitz, "The Merchant of Venice," *Shakespeare in Perspective Vol. 1* (BBC, 1982) p. 208.

51) 小室金之助『法律家シェイクスピア』（新潮社，1989）p.75.

52) D. M. Cohen, "The Jew and Shylock," *Shakespeare Quarterly 1* (1980), p. 54.

53) *ibid.*, p. 56.

54) Warren D. Smith, "Shakespeare's Shylock," *SQ 3* (1964) p. 196.

55) John R. Cooper, "Shylock's Humanity," *SQ 3* (1970)

56) Mark H. Gelber, "Coping with Literary Antisemitism," *Patterns of Prejudice 1* (1986) p. 41.

57) ワルター・イェンス著，小塩節・小槌千代訳『ユダの弁護人』（ヨルダン社，1980，原書初版は1975）

58) Mankowitz, *op. cit.*, p. 212.

59) Glenda Leeming, ed., *Wesker on File* (Methuen, 1985) p. 40.

60) 山内昌之『ラディカル・ヒストリー』（中央公論社，1991）p.134.